No67　平成30年新年号

道　南

北海道道南会会報
No67　平成30年新年号
発　行　2018年1月1日
発行所　北海道道南会事務局
連絡所　茨城県取手市西
1-6-C-907
TEL&FAX　0297-74-7576

ふるさとを訪ねて

北海道道南会会長　薬袋　泰

新年明けましておめでとうございます

皆様お変わりなく元気に、新しい戌年の新春をお迎えになられたことと、心からお慶び申し上げます。

さて、昨年もまた九州北部豪雨（福岡・大分）、秋田県大雨、台風18号（大分）による災害と台風、集中豪雨等々で全国各地で度重なる災害に見舞われました。特に道南地方では10月、二度の台風に見舞われ収穫時期のリンゴが大きな被害を受け果樹園農家の方々は出荷に大変な苦労をされたようです。

我がふるさと七飯町は、昨年町制施行60周年を迎え記念式典が盛大に催されましたが、中学校の同期の私たちも卒業60年を迎え10月22日に60周年記念同窓会が行われ、久し振りに参加し旧交を温めました。その折、時間を取って日帰りで、一度行ってみたいと思っていた中村隆俊顧問（戸田中央医科グループ創設者）の故郷・瀬棚町（現・せたな町）の三本杉岩を訪ねてみました。

当時、瀬棚町から函館に行くのは大変だったようで、一日2往復しかない瀬棚線の北桧山駅から函館本線の国縫駅まで2時間かけて行き、そこから函館まで5時間（現在は瀬棚線は廃止され、替わりにバスが運行されている）。現在は高速道路も整備され、鉄道、道路事情も良くなり3時間位で行けるようになっています。当日は、JRの特急北斗号で長万部まで行き、そこからバスで国縫を経て一路せたな町へ向かった。太平洋側から今金町の山中を抜けて日本海側への移動。車窓からの眺めは、晩秋の紅葉が素晴らしく目を和ませてくれました。アイヌ語に由来した地名が多く、水の綺麗な川やダムを見ながらのバスの旅。

せたな町の三本杉岩

せたな町に入り最初に目に入ったのが洋上風力発電の幾本もの風車。平成16年から本格稼働が始まった日本初の洋上発電の風車の羽根は鳥のイメージに重ねて「風海鳥」と名付けられています。町内を散策しながら目的の「三本杉岩」を見に海岸へ。自然の雄大なパワーを感じる三本杉岩。高さ30mの三つの巨岩はまさに紺碧の海にあたかも三本の老杉が波間にそびえ立つようです。期間限定でライトアップされ、幻想的な雰囲気を漂わせます。

中村隆俊顧問は昭和36年、戸田町（現・戸田市）に戸田中央病院を創設して以来、埼玉県を中心に関東一円に数多くの病院、介護老人保健施設など計114か所の関連事業を保有する巨大医療グループに成長しました。中村顧問は平成28年秋、戸田市の医療・介護・保健等の分野で多大な貢献をしたことから同市名誉市民第1号として顕彰され、昨年には優れた経営手腕と地域貢献が認められ渋沢栄一賞を授与されました。昨夏、グループが創立55周年を迎える中村顧問の地域医療にかける半生をたどる記事が埼玉新聞に9回連載されました。その中で印象的な事が。父・末吉さんが兄弟喧嘩をする3兄弟を三本杉岩の所に連れて行き、三本杉岩を指さし「毛利元就の三本の矢」の逸話を語らせ、これを受けて父・末吉さんは、海に浮かぶ三本杉岩を指さし、どんな荒波が打ち寄せても三つの岩が一緒なら崩れない、乗り越えられる、と諭した。3兄弟は「私たちはどんな困難に出合おうとも3人協力して立ち向かっていきます」と三本杉岩に真剣に誓ったと記されております。

道南会の新年総会・懇親会は、2月3日（土）にホテル・ラングウッドで開催されます。多くの会員の皆様のご出席をお待ちしております。

函館市便り

函館市長　工藤　壽樹

新年明けましておめでとうございます。

平成30年の新春を皆様とともにつつがなく迎え、お祝いできますことをお慶び申し上げます。

貴会におかれましては、昭和35年の創立以来、半世紀を超える長きにわたり、「ふるさと道南」を心の絆として会員相互の交流と親睦を深め、固い結束のもと、幅広い分野において活発な活動と郷土発展への貢献を続けられ、今日のご隆盛を築かれておりますことは、薬袋会長をはじめ歴代会長、役員、会員の皆様の一方ならぬご努力の賜と存じ、心から敬意を表します。

さて、昨年を振り返りますと、4月には、中心市街地の本町・五稜郭地区のシエスタハコダテ内に「函館コミュニティプラザ（Gスクエア）」がオープンし、若者を中心に当初の予想を超える賑わいを見せており、周辺の商業施設などとの相乗効果も現れています。

9月に開催された本市最大級の食のイベント「はこだてグルメサーカス」では、広域連携を進めている秋田県の大館市、仙北市、小坂町をお迎えし、特別企画として「秋田犬ＭＯＦＵＭＯＦＵひろば」を設け、秋田犬とのふれあう機会や県の名産品を提供したほか、函館とゆかりのある地域・国からのグルメが集結し、2日間で23万9，000人の方にお越しいただきました。

10月から11月にかけては、北海道唯一の国指定文化財庭園である名勝旧岩船氏庭園「香雪園」で、美しい紅葉をライトアップする「ＭＯＭＩ―Ｇフェスタ」が開催され、ミニライブや体験会など様々なイベントが彩りを添えました。

11月には、テレビ番組の「ザ！鉄腕！ＤＡＳＨ!!」において、生産高全国一位を誇る函館の真昆布が紹介される企画があり、北海道道南会の皆様には、遠方での撮影にも関わらず応援に駆けつけていただくなど、本市の特産品ＰＲに対し大変なお力添えを賜り、心から感謝申し上げます。

12月のイベントとしては、姉妹都市であるカナダのハリファックス市から贈られたモミの木がクリスマスツリーとして冬のベイエリアに登場する「はこだてクリスマスファンタジー」が本年で20回目を迎えました。これを記念し、初日および23日から25日までは1日2回の花火の打上げやフロントグラフィックレーザーによる幻想的な世界をツリーに映し出しました。また、歴史的な建物が建ち並ぶ元町地区がきらめく「はこだてイルミネーション」、函館駅前では、いさり火をイメージしたあたたかなフレームと美しい灯りが観光客をお出迎えする「函館駅前広場イルミネーション」なども開催しました。

そのほか、「冬に恋。函館」をキャッチフレーズにイベントや限定メニューを一体的にＰＲするなど、冬季の観光客誘客に取組んでいます。さらに、拡大するインバウンド需要の取込みが重要であることから、経済界と連携し、東アジアや東南アジア地域へのトップセールスを行い、新たな航空路線の誘致等を進めています。また、夜景だけに頼らない観光資源づくりも重要であることから、他都市にはない函館の独特な町並みである直線的な坂と港、教会が織り成す風景を「恋人たちのまち函館」として国内外に発信してまいります。

今年は北海道新幹線開業から3年目を迎えます。これまでの函館の再生に向けた各般の施策に加え、「ポスト新幹線時代」のまちづくりとして、

はこだてグルメサーカス

MOMI－Ｇフェスタ

名実ともに魅力あるまちをめざし、函館の新たな可能性を広げる取組みを進めてまいります。

日吉地区では、福祉コミュニティエリアの介護施設や多世代交流施設などが順次オープンするほか、亀田地区における統合施設の建設工事に着手します。また、函館駅前・大門地区では、はこだてグリーンプラザを整備するための実施設計を行うほか、函館駅前市有地等における宿泊・商業施設の建設が始まるなど、今後も賑わいと活気のあるまちづくりに向けた取組みを着実に進めてまいります。

さらに、全国的に所有者不明の土地が問題となっており、10年後には総住宅の25％が空き家になるとの懸念もある中、本市におきましても人口減少による都市の低密度化が進行しないよう、拡大した居住区域を中心部に誘導するとともに、日常生活に必要なサービスの低下をできる限り抑え、まちの様々な機能を集約化し、将来にわたって持続して市民が幸せを感じられるまちづくりに取組まなければなりません。特に人口減少と高齢化が著しく、観光のメッカでもある「西部地区の再生」を図り、市内外の富裕層や若者を含めた多くの方々が住めるような住宅地として再整備してまいりたいと考えています。

また、定住人口が減少するなかにおいては、地域経済の縮小を補うためにも、交流人口の拡大が今後ますます重要となります。住む人や訪れる人が見て、歩いて、感じて楽しいまちをめざし、歴史と景観に配慮した、デザイン性が高く美しい整備により、まち全体を公園のようにする「ガーデンシティ函館」の実現に向けて、昨年、国土交通省の「景観まちづくり刷新モデル地区」の全国10か所のひとつに選定されたところであり、開港通りをはじめとする市道の整備や函館山遊歩道の再整備など、目に見える形でまちの進化が実感できる取組みを引き続き進めてまいります。

このほかに、新幹線や高規格幹線道路、重要港湾、拠点空港がコンパクトに揃っている「陸・海・空の交通の要衝」としての利点を活用した交流人口の拡大にも努めてまいりたいと考えています。特に、本市は道内トップのクルーズ客船の寄港地であり、昨年は28隻が寄港し約5万2千人の乗客が訪れており、市民による入港歓迎セレモニーなどの取組みが高い評価を得ています。平成30年度の若松地区クルーズ船岸壁の暫定供用に向け、先般、本格的な工事が始まったところです。昨年は、アメリカのマイアミ市においてクルーズ船社へのポートセールスを行いましたが、今後も国内外クルーズ客船の誘致に積極的に取組むほか、新幹線や航空機と組み合わせたレール&クルーズ、フライ&クルーズによる利用客拡大を図ります。

これらの取組みとともに、昨年の函館アリーナで実施した食のイベントについて、家族連れがより楽しめるよう内容を充実させ「はこだてフードフェスタ」として開催するなど、食の魅力を生かしグルメのまちをめざす「食の産業化」を進めるほか、いつもイベントが開催され人々が集まり賑やかで活気のあるまち「フェスティバルタウン」をめざすなど、中長期的にまちの魅力向上や賑わいの創出を図るとともに、次世代を担う子どもたちがまちに誇りと愛着を持ち気概を持って地域を支えていく「人づくり」も進めてまいります。

今後におきましても、観光やビジネス、さらには文化・スポーツなど様々な分野で交流人口の拡大を図るとともに、住む人、訪れる人、誰もが魅力を感じるまちづくりを進めてまいりますので、皆様方のより一層のお力添えをお願いいたします。

結びにあたりまして、北海道道南会のさらなるご隆盛と会員の皆様のますますのご健勝、ご活躍を心からお祈り申し上げ、新年のご挨拶といたします。

はこだてクリスマスファンタジー

函館駅前広場イルミネーション

はこだてイルミネーション

はこだて人物誌　番外編
函館太洋倶楽部の思い出

道南会会員　沢株　正始
幸小学校出身

函館市西部地区のバス通りを船見町のほうに登ってすぐにみえる名刹・高龍寺の手前を左に伸びる道は、公会堂から旧護国神社前を通って谷地頭の八幡宮につながる格好の散歩道で、いまでは代表的な観光コースになっています。この道の初っ端に三つのお寺、右から実行寺、称名寺、大谷派函館別院が並んでいますが、真ん中の称名寺の境内に、大きな野球のボールをかたどったお墓が建てられています。ここに眠っているのは函館が誇る実業団野球チーム・函館太洋倶楽部（函館オーシャン）の名捕手、久慈次郎。昭和14年に札幌・円山球場で開催された北海道樺太実業団野球大会の試合中に牽制球を頭部に受けて、そのまま帰らぬ人となったことは、あまりにも有名でした。彼の早すぎる死を惜しんだ函館市民・関係者は、自宅から葬儀場まで千人以上の長蛇の列をなしたと伝えられています。

函館オーシャンスタジアムの久慈次郎の像

「函館太洋倶楽部」が誕生したのは明治40年のことです。当時、弥生小学校で教鞭をとっていた下河原清が同窓生に声をかけて結成され、チーム名は開港場・函館にふさわしく「太洋」とつけられました。英語名は「オーシャン」で、練習で使われている千代岱野球場はチームにちなんで「オーシャン・スタジアム」と名付けられていることはご存知のとおり。なお、この球場のそばには、ミットを構えて捕球態勢の久慈次郎の銅像も建てられています。

さて、今年（平成29年）9月2日の道南会夏季懇親会場で、昭和戦前期の函館太洋倶楽部の活動を伝えるパネル展示がありました。作者は今井雅子さん。今井さんの父方の祖父・今井精二さんは昭和の初期に投手として太洋倶楽部に所属されており、ちょうど久慈次郎選手や橋本・永澤選手らと同じ時代に在籍し、活躍されていたといいます。

今井　精二氏

昭和2年から都市対抗野球大会が始まりますが、翌3年の大会に北海道代表として参加し、神宮球場に行った際の新聞記事の記録が中心です。このときは1回戦で東京倶楽部と対戦し、残念ながら1対3で敗退しましたが、7月27～8月5日の「函館新聞」は、出発から東京での活動まで、「太洋遠征記」と題する7回の連載記事に仕立てて、熱気たっぷりに伝えています。昭和10年に鴻之舞の住友金属鉱山で投手として活躍し、12年からは満州にわたって野球をつづけ、21年に引き揚げ、以降、南茅部で商売のかたわら後進の指導を続け、昭和58年に76歳で永眠されました。ちなみに、今井さんの投手としての特性は、変化球が多彩であったことから「たぬき」とあだ名されていたそうです。

ところで、今井さんが満州に渡ったのが昭和12年、そこで阜新と瀋陽の満州炭鉱株式会社の野球部で投手を、そして17年から20年まで長春の満州重工業開発の野球部で今度は監督を努められたということです。当時、満州では満鉄が大きな力を持っており、日本人も多くいたこともあって、野球はきわめて盛んでした。満州のリーグもできており、日本の大会への参加もありました。満州へ渡った今井さんの活動内容が気になりますが、今のところ詳細は不明です。情報をお持ちのかたがおられましたら、ご一報いただければ幸いです。

昭和３年の第２回とした以降野球に出発する
函館太洋倶楽部選手団。上の○印が今井氏

［本稿執筆に際しては、今井雅子さんから資料のご提供をいただきました。］

「無財の七施」と小学生
－旅で出会った心温まる小学生たち－

小山　光

今年の6月下旬のある日、私は大宮駅から新幹線に乗り、秋田にある先祖の墓詣りを終えて函館に向かった。

東北新幹線の「新函館北斗駅」延伸の効果の現れか、函館市内には、いつもより多くの観光客や修学旅行生が溢れていた。函館駅前から乗車した市電には、まさに修学旅行らしい小学生の一団が乗っていた。胸に下げた名札には、秋田市から東に離れたある小学校の名が記されていた。観光名物の赤煉瓦街を見に行くのか全員は十字街電停で下車したが、降り口でほとんどの児童が運転手に対して「有り難うございました」と礼を述べ、数人の児童はわざわざ帽子まで脱いで頭を下げて降りていった。

函館市電

残念ながら、首都圏のバスなどではそのような小学生は目にした事はないので、驚きを禁じ得なかった。「電車賃を払って乗っているのだから、運転手に礼を言う必要はない」と考えるのが普通であろう。仏教の「雑宝蔵経」の中には「無財の七施」という教えがあり、我々の日常生活において、お金が無くても物が無くても廻りの人々に喜びを与えて、少しでも喜んで戴ける方法があると聞いている。

「無財の七施」の中には「心施」「言辞施」があり、これは他人のために心を配る、優しい言葉で接する事を意味している。これら児童の行動は、まさに「言辞施」「心施」の実施であり、秋田県人の風土に根ざしたものかも知れないと感じた。

更に翌日、市電に乗ったところ、今度は北海道岩内町から来た修学旅行のグループに出会った。当初これらの児童は全員が座席に座っていたが、車内が混んでくるにつれ、つり革に下がっている若くもない乗客にまで次々に席を譲り始めた。これは「無財の七施」でいう「床座施」で、「座席だけではなく、すべてのものを分かちあう心が大切である」という実際の行動であった。

帰宅後に秋田県の小学校に電話をかけて、この児童達は6年生で1泊2日の修学旅行に出かけていた事を確認した。電話に出た女性の教師と思われる方に、この心温まる話をしたところ、非常に喜んでおられた。

その後、校長宛に手紙を書き、「無財の七施」を修学旅行でさえも実現している貴校の教育は素晴らしいものと思うが、どのような内容で心の教育を行っているのか、後学のために教えて欲しい旨をお願いした。

しかし、その後1ヶ月を経過しても校長からの連絡はなく、更に2ヶ月目に再度お願いの手紙を送ったが、それでもナシノツブテの状態で過ぎている。

北秋田市に、もと高校の校長をした知人がいるので、これらの状況を手紙で説明したところ「校長が返事を出さないと言うことは考えられない。恐らく病気などで休職中なのではないか？　学校ではよくあることだ」との返事が来た。校長が無理であれば、教頭先生などが代わって返事を書きそうなものだと思ったが、同じ教職者としてかばっているのではないかとも思って、それ以上は聞かなかった。

考えてみれば、面識も無い埼玉県人から突然のように仏教用語を元に児童を誉められて、いかがわしい宗教法人からの勧誘では…と警戒されたのか、あるいは引率教師2人からは、いずれも「有り難うございました」との言葉が出なかった事も考え合わせれば、これらの行動は小学校の教育とは関係ない、児童達同士の申し合わせによるもので、校長も戸惑って返事を書けずにいたのかも知れない。

私ども老人は、「今時の子供は…とか、最近の若者は…」と口にしがちであるが、これらの子供達が大人になった時、現在以上に日本人は礼儀正しい国民と評価されるだろうと期待している。

私もその後は、首都圏のバスや函館の市電を降りる際には、これらの小学生に倣って「有り難う」と言うことにしている。当初はためらいがあったが、今では自然に言えるようになった。

函館坂道物語

函館山麓には、港や市街を望む景観が美しいさまざまな坂があります。ここでは数ある坂の中から、著名な観光スポットとしても知られるものを紹介します。

八幡坂

基坂上の箱館奉行所付近にあった八幡宮が、1804年（文化元）奉行所の拡張工事に伴い、この坂の上に移されたことからこの名前が付きました。八幡宮は1878年（明治11）の火災によって焼失し、翌々年に現在の谷地頭町に移っています。

大三坂

昔、坂の入り口に大三という家印の郷（ごう）宿（やど）があったのでこの名前が付きました。郷宿というのは、地方から公用で出てくる村民が泊まった宿で、それ以前は、木下という人の家があったので「木下の坂」といいました。1987年（昭和62）には「日本の道百選」に選ばれています。

チャチャ登り

函館では珍しいアイヌ語の坂名で、幕末頃についた名前のようです。チャチャとはおじいさんのことで、この坂が急なため、前かがみに腰を曲げて登る姿が老人に似ていたことから「チャチャ登り」と呼ばれました。

二十間坂

かつて、坂上に大工や工人が多く住んでいたことから「大工町坂」とも呼ばれていました。函館は大火が多く、1879年（明治12）の大火後、防火帯として拡幅されて出来た坂で、路幅が二十間（約36ｍ）であるので「二十間坂」と呼ばれています。

護国神社坂

別名「汐見坂」ともいい、昔は「招魂社の坂」とも「倒産坂」ともいいました。汐見坂は坂上の汐見町（当時）の町名に由来するものです。

招魂社の坂は1869年（明治2）に建立された招魂社（現護国神社）に登る坂ということから呼ばれ、現在の名前になりました。倒産坂は坂に面して門を立てると罰が当たって〝かまど〟がつぶれるといわれ、昔は門を坂に面しないようにしたといいます。

基坂

かつては函館から札幌へ向かう函館本道の起点で、坂下に里数を計る元標が建てられていたので「基坂」といいます。坂の上は箱館奉行所があった中心地で、江戸時代には「お役所坂」、「御殿坂」とも呼ばれました。

常盤坂

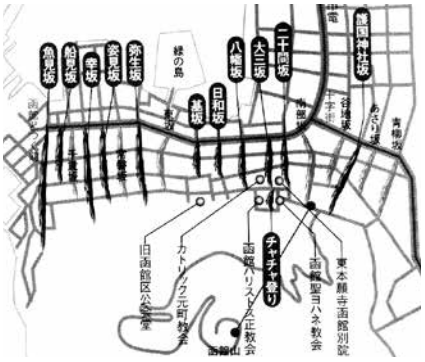
江戸時代後期、この坂の上に大石忠治郎の屋敷があり、そこに奥州の「義経腰掛けの松」と称された銘木の種を得たという大きな松があったので、常盤の松にちなみこの名が付きました。

また昔、坂の中ほど一帯に遊郭があって、遊女と別れを惜しんだ客が坂を見返るということから「見返り坂」といわれ、上に芝居小屋があったことから「芝居町の坂」ともいわれました。

姿見坂

かつて、坂の上にあった遊郭にちなむ名で、遊女達の艶姿が見られたことからこの名が付きました。遊郭は江戸の吉原を模し、付近は茶屋町と呼ばれて賑わいを見せましたが、1871年（明治4）の大火で焼失し、蓬莱町（現宝来町）へ移りました。

（函館歴史文化観光検定「はこだて検定公式テキストブック」より転載）



昭和の回想（1）

道南会会員　沢株　正始
幸小学校出身

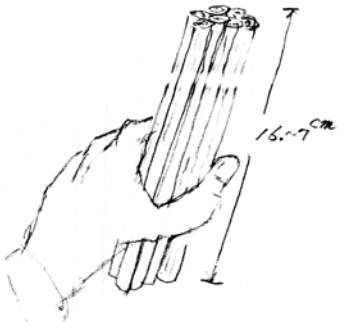
戦争をはさんで63年も続いた昭和という時代、戦後のどん底生活もあれば、高度成長に浮かれた時代もありました。政治も社会も生活もいろいろな移り変わりを示しながら過ぎてきて、どうやらあと2年もしないうちに、また新しい元号が生まれそうです。

それにしても昭和という時代は、いま生きている私たちにとって、どうしても忘れられない時代だったと思う方もおられるでしょう。

いろいろな状況の変化を体験したなかの一つに、子供たちの遊びを取り上げてみたいと思います。子供の遊びについては、それだけで多数の本もあり、とめどなく広がってしまいますが、今回は状況をきわめて狭く絞ってみて、昭和12～13年ころの函館、というやや特異な設定をしてみました。この頃でも、男の子はカルタや双六、そして外ではチャンバラ、メンコ（パッチ）、女の子はお手玉、あやとり、おはじきにままごと、人形遊びなど、他とあまり変わらない遊びが、やはり主流だったようです。ただ、やや特異な設定としたのは、道南会の古参会員・小助川昭一さんのお話をもとに、すこしアレンジしてご紹介しようと考えたからです。

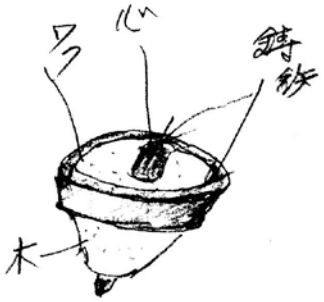
「子供時代（昭和12、3年頃）、世の中は毎日、平穏な時代だったと思います。小学校5年の頃、日支事変が始まり、支那大陸（今の中国）の南京（首都）陥落などで、旗行列で町を歩いたことを思い出します。

この頃の子供の遊びは、何ともハヤお粗末なもので、センヂ（センシャク）なる竹の棒を6、7本、右手でたばねて持って、ぐるーっと廻し、手を放してまた持ち換えて握り、それを何度かする。今からみればたわいもない遊び。それからパッチ（東京ではメンコ）。雪も消え路上が乾くと近所の子供らがパッチを持ち寄り、小路で始まります。谷地頭の市営住宅だったので、9年の大火で焼け出された人のために市が建ててくれた住宅で、子供も結構多かったと思います。そのガキどもが昨年のパッチを箱に入れて持ってきて、夕暮れどきに親の「ご飯ですよ」の声で、また箱に入れて帰るという、庶民長屋の毎日でした。



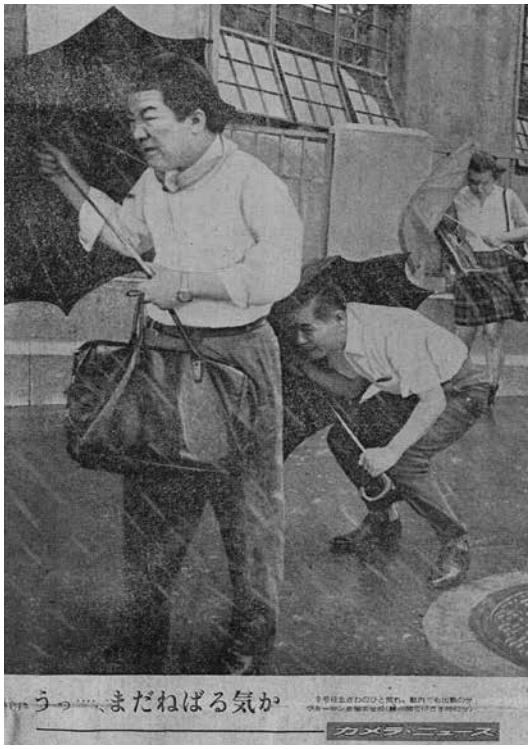
竹製セン尺

また、駒（コマ）遊びも盛んで、やはり夕暮れ時に近所の子供たちが集まり、それぞれの持ち駒で勝負しました。ベエ駒なんてあんなチャチなものなく、立派なもの。駒を廻すときは、ゲッコーとかゲの前とか言って、ぶつける順番の呼び名だったと思います。駒自体は、胴は木製ですが、枠と心棒は鉄製で、これも何年も使っていると貫禄が出てきて、子供ながら大事に机の奥にしまっておきました。親に見つかって、こんなものを勉強机の中に一緒にするなと叱られますが、子供にとっては来年までの宝です。明けて次の年に使う前がまた大変。時間がたって乾燥して本体（木の分）と鉄の枠がガタガタになるので、使う前の手入れが大変。今ではとても許されない作業があります。乾燥して枠が木からはがれてしまい、それを複製するのに、使う3、4日前から道路わきのドブ川に漬けておき、木の部分が完全に膨張して枠にきっちりはまったら駒は完成。次に廻す原動力となる紐です。紐は麻製で、締め付ける部分を最後に調整する。駒にキッチリ巻くために紐の先をナメってナメって削り、調整して出来上がり。店で買ったものを自分流に作り上げるのに子供ながらの自負心がありました。」



ベーゴマ

以上、小助川さんの思い出話ですが、もう一つエピソードを付け加えましょう。ここに掲げたのは、時代がぐっと下って昭和44年8月23日の『読売新聞』夕刊で、このとき鹿児島に上陸して日本列島を縦断した台風9号が東京に襲来した際のスナップ写真です。なんと、傘をかざして風雨に耐えている人物が小助川さんだそうで、この話は昨年7月末に新橋で行われた暑気払いの会でご本人から披露されました。めったにない経験でしょうね。



昭和44年8月23日の読売新聞夕刊

長島さん さようなら

柏野会創立同志との出会いと死

小山　光

北海道道南会会員で柏野小学校同期生でもあった長島康さんが、10月上旬に「急性骨髄性白血病」で他界した。長島さんとは小学校のクラスも異なり、その後の進学校も異なっていたこともあって、卒業後は顔を合わせることもなかったが、半世紀ぶりに顔を合わせたのは、平成14年に開かれた道南会の席上であった。

新入会員紹介の席上の自己紹介で出身校を名乗ったとき、やっと長島さんを想い出した。

長島　康氏

その後、何回か会って当時の想い出に花を咲かせている内に、どちらからという事もなく「会員の中で他の小学校卒業生には同窓会組織があるのに、なぜ柏野には無いのだろう」という話が自然に持ち上がり、手始めにそれぞれ関東地区在住同窓生の住所を調べ始めた。私はせいぜい十数名であったのに対して、彼はその幅広い人脈を駆使して数十名の同窓生住所を調べあげた。それに基づいて、昭和12年卒から25年卒までの同窓生の中から13名に発起人をお願いし協議を重ねた結果、平成15年6月にお茶の水駅近くの「ホテル聚楽」で設立総会を開く処までこぎ着けた。

この間、Iさん（昭和12年卒）に会長を、Oさん（昭和17年卒）に会計幹事をお願いし「柏野会」会則の制定の打合せなど精力的に活動を行って貰った。もしあの時、彼の幅広い人脈と、同窓会を設立しようという強い意欲がなかったならば、現在の「柏野会」は無かったかも知れない。

彼は小学校では級長を務め、運動会では東京からの疎開で転入した東京都検定体力優良児のH君を追い抜くなど運動能力も抜群であったが、それらの才能が同窓会立ちあげの場でも発揮された感じであった。

昨年、柏野会で顔を合わせた時、彼から思いがけない言葉が出た。「医師から根治は無理と言われる病気になって、余命はあと一年と言われているんだよ」と笑顔で語りかける彼に、その言葉は信じられなかった。その後、彼は一度だけ柏野会に出席したが、会場でも気軽に話しかけ元気に写真を取りまくる姿に、残り少なくなった余生という姿は全く感じとられなかった。もし私自身が同様な宣告を受けた時、長島さんの様な態度で会合に出席出来るかどうか自信はない。

弟の遠藤宏さんと

若い頃に読んだある本の一節に、次のような言葉があった。

「人間の死とは、心臓の鼓動が止まった時を言うのではない。その人の姿が消え去っても、人びとの心の中に想い出が残る限りその人は生き続け、人びとの脳裏からその記憶が消え去った時に、その人は本当の死を迎える」。このような意味では、道南会や柏野会での出来事を含め、彼の想い出が残る限り生き続ける事になる。

謹んでご冥福をお祈りしたい。

北海道道南会会員プロフィール

阿部　勉

昭和29年函館市生まれ。松風小、松川中、函館商業高校を卒業後、神奈川県の観光学校を経て、函館・横浜で十数年に渡り、旅行会社で国内・海外旅行に携わる。その後、平成12年に建設業界に転身して建築解体業を自営後、同17年三共工業（有）に社名を変更して、現在は横浜市瀬谷区と昨年東京都千代田区に東京営業所を開設して現在に至ります。数年前に大病を患って以来、ふる里・函館への想いが強まり、今回道南会へ参加させて頂きました。よろしくお願いいたします。

土肥　健作

昭和41年1月5日生まれ。戸倉中学校、函館東高校を卒業し、明治大学に入学。卒業後は、有楽土地㈱（現・大成有楽不動産）に入社。以来20数年にわたり不動産業に携わってきました。平成29年5月、函館東高校の関東の同窓会「関東青雲同窓会」の幹事長役を拝命致しました。函館が青春を謳歌したあの時代のような活気ある街に復活するように、微力ながら尽力して参りたいと思います。

ふるさと会だより

「東京北斗会」総会・懇親会

道南会会長　薬袋　泰

「第23回東京北斗会定期総会・懇親会」は平成29年10月21日（土）アルカディア市ヶ谷で午後1時より来賓・会員及び関係者75名が出席して盛大に開催されました。

総会は佐藤金也会長の挨拶の後、28年度活動報告並びに決算報告、会則改定の説明があり、審議が行われ、新任2名を含めて役員紹介の後、米田事務局長の閉会の言葉で総会が終了。懇親会は、宮崎事務局員の開会の言葉に続き、司会者より来賓の方々が紹介され、代表として滝口直人副市長は、昨年3月開業の北海道新幹線により観光客も増加し、駅前にはホテルが開業するなど、街の様子も変わりつつあり、これから更に整備を進め活性化を推進して行くと同時に企業誘致の推進に努めて行く。また、子育てにも力を入れて取り組んで行く。米等の農作物は平年並みで順調であるが、サケ漁が今年も不漁で心配をしている等、北斗市の現況を報告された。

続いて、北海道ふるさと連合会高橋照美会長のご発声で乾杯、祝宴に移った。

新入会員4名が紹介され、各テーブルではそれぞれ故郷の話などで盛り上がり、舞台では余興、アトラクション、カラオケ等々で会場は更に賑々しくなる中、お待ちかねのお楽しみ抽選会に移った。郷土の色々な特産品などが当たり、会場は些か興奮気味で大騒ぎ。楽しいうちに閉会の時間となり、お米や特産品のお土産を手に、またの再会を楽しみに散会した。

同窓会の活動状況

◆常盤小学校同窓会
10月21日（土）
東海大学校友会
参加者　13人

◆幸小学校同窓会
10月28日（土）
銀座アスターベルシーヌ
竹芝店
参加者　14人

◆函館工業高校同窓会
10月29日（日）
ホテルラングウッド
参加者　74人

◆白楊ケ丘同窓会東京支部
第41回親睦大会
（函館市中部高校同窓会）
11月18日（土）
グランドアーク半蔵門
参加者　170人

◆東京千代岱第11回総会
（函館市立千代岱小学校同窓会）
11月25日（土）
古寿茂・兜町店
参加者　9人

◆遺愛女子高校同窓会
12月1日（金）
アイビーホール青学会館
参加者　147人

あけましておめでとうございます

朝倉　敏夫　石戸　六男　泉　龍夫
今井　雅子　岡本　信三　小山　光
笠川　雅彦　金子　公彦　金子　忠雄
佳山　明生　川瀬　俊吉　川守田礼子
神山　茂郎　小島　幸子　小助川昭一
小谷　泰三　小林智恵子　小山　和彦
郷内　繁　酒井　哲美　佐々木俊克
澤井　隆　沢株　尚子　沢株　正始
島田　瑞子　白川　正広　新谷　義克
末永　昌子　菅原　大作　須藤　珠実
高橋　厚子　高橋　順吉　谷口雄二郎
続　薫　富岡　信夫　豊田　利雄
鳥本　玲子　中村　隆俊　納代　鉄也
楢木　久澄　新山　春一　沼崎　貞良
沼崎　茂子　根来美和子　濱　光徳
比嘉　裕子　檜森　兄元　福崎　正春
福地　史人　古井　勝春　本間　和吉
松田　州平　松田　昇　水木　昭弘
薬袋　泰　南谷　光一　三村　寿雄
森本　貞子　安田　康次　山田　克明
山田トミ子　山本　久子

平成29年度 夏季懇親会

今年の北海道道南会夏季懇親会は、9月2日（土）正午より、東京・荒川区東日暮里のホテルラングウッド・鳳凰の間で、来賓・会員・ゲスト89人が出席して行われました。

会は、島田瑞子副会長の司会で始められ、最初に薬袋泰会長が「今年の夏は、7月の猛暑とは対照的に8月は長雨が続いて天候不順で体調を崩しがちだったが、皆さん元気にご参集いただいて大変嬉しく思う。夏季懇親会では、新年総会と違い特別な行事はない。今日は皆さん大いに楽しんでいただきたい」と挨拶した。

続いて、新入会員として参加された7人の方々を紹介。皆さんには自己紹介として出身小学校などを述べていただいた。

そして、以前函館市東京事務所長をされていた酒井哲美さんが「東京事務所在任時には、道南会の皆さんには大変お世話になった。お礼の意味を込めて、函館市に戻っても道南会員として新年総会や夏季懇親会に参加させていただいている。今後の道南会の一層の発展とご参加の皆さんのご健勝を祈念して」と乾杯の音頭を取り、開宴しました。

会場内には、函館市と七飯町大沼の観光ポスターが多数貼られて雰囲気を盛り上げた他、会員の画家・今井雅子さんの祖父がノンプロ野球・函館太洋倶楽部の選手として活躍されていた頃の写真と解説をパネル展示されました。会場内の各所からは懐かしい函館弁での会話が交わされ、バッググラウンドミュージックとして、会員の嶋村悦子さんのお嬢さんの歌手・飛鳥とも美さんの歌「永遠（とわ）の春」が流されていました。

今年のアトラクションは、現役の芸者さんの安保咲子さんが目出度い「上げ潮」を曲に合わせて優雅に舞って、皆さんから大きな拍手を受けていました。続いて、歌手の池田さなえさんは、持ち歌の「明日のわたし」と「函館ステップ」を熱唱。大きな歓声を受けていました。

また、ゲストの平川千栄子さんを先頭に、お揃いの法被を着た有志の方々が会場一杯に輪になって懐かしい「港おどり」の曲に合わせて踊り、改めてふるさと・函館を思い出していました。

そして、函館の応援歌として〝青春時代〟の替え歌「函館時代」を全員で合唱、一層盛り上げていました。また、高橋順吉さんと川瀬俊吉幹事が音頭を取って、北海道道南会へのエールを送りました。

最後に、三村寿雄副会長が、閉会の言葉と三本締めを行って、午後2時30分過ぎに次回の再会を約束して終了しました。

この日のご参加の皆さんには、お土産としてサッポロビール提供の「麦とホップ」が、そして函館市や大沼の観光パンフレットなどが配られました。

顧問・相談役会

11月6日（月）午前11時30分より、東京・銀座「梅の花」で、松田昇・郷内繁・沢株正始・南谷光一・石戸六男顧問、沼崎貞良相談役、新山春一会計監査、薬袋泰会長、島田瑞子・三村寿雄副会長などが出席して顧問・相談役会が行われた。

会では、島田副会長の司会で、最初に薬袋会長が「２０１７年度の行事や幹事会の開催、会報の発行、中村隆俊顧問が埼玉県より〝第15回渋沢栄一賞〟を受賞したこと、10月25日に卒寿を迎えられたこと、函館市農林水産部の要請で函館真昆布ＰＲのテレビ番組〝THE 鉄腕 DASH〟のヌルヌルつるつる選手権のロケに協力したこと、２０１８年度新年総会・懇親会の開催」などについて報告した。

この後、函館市の人口減、大手傘下企業の撤退などのふるさとの現状を憂える。函館圏市町の合併・統合の対策について、新函館北斗駅から函館駅への交通アクセスの整備、函館を訪れる観光客への対応についてなど、様々な話題を含めた歓談が行われた。

平成29年度 夏季懇親会出席者

【来賓】

※北海道ふるさと会連合会

副会長　高橋　守

【参加者】

阿部勉、安保咲子、池田さなえ、石戸六男、泉龍夫、伊藤幸男、井上千春、今井雅子、浦野富美子、岡本信三、折田信一、笠川雅彦、勝木重蔵、金柿陽子、金子公彦、金子忠雄、川瀬俊吉、川守田礼子、川小ヒナ子、勝木重蔵、菊池紀邦、小池貴幸、小島幸子、小助川昭一、小林智恵子、小山和彦、酒井哲美、坂本保子、佐々木俊克、佐々木豊子、佐藤昇、沢株尚子、沢株正始、汐谷進、渋谷美日子、島田瑞子、嶋村悦子、新谷義克、神れい子、末永昌子、菅原大作、杉澤順一、須藤珠実、砂山和義、高橋厚子、高橋順吉、谷口雄二郎、千歳芳光、土橋道子、続薫、土肥健作、中川和彦、中山泰誇、中山泰誇、楢木久澄、成田慶子、新山春一、根来美和子、野口晴雄、濱光則、比嘉裕子、檜森兄元、福崎正春、福地史人、古井勝春、本間和吉、松田州平、松田昇、三浦一志、水木昭弘、道下佳拓、薬袋泰、南谷光一、三村寿雄、森本貞子、森山耐介、八鍬武、柳下五百子、安原秀樹、山田克明、山田トミ子、山手章、山本久子、吉岡孝行、吉野俊郎、渡邉一郎、渡部良孝

【ゲスト】

石原宏子、小泉金次、平山千栄子

新入会員紹介

（　）内は出身小学校

◆阿部　勉（函館市立松風小）
道下佳祐さんの紹介。

◆伊藤幸男
（函館市・旧南茅部町立磨光小）
石戸六男顧問の紹介。

◆浦野富美子
（函館市・旧南茅部町立磨光小）
酒井哲美さんの紹介。

◆小池貴幸
（函館市・旧戸井町立潮光中）
安保咲子さんの紹介。

◆渋谷美日子
（函館市・旧南茅部町立木直小）
酒井哲美さんの紹介。

◆谷口雄二郎（函館市立東川小）
石戸六男顧問の紹介。

◆土肥健作（函館市戸倉中）
薬袋泰会長の紹介。

北海道道南会のホームページ

http://hokkaido-dounankai.com/

道南会では、ホームページを開設して、50年以上に及ぶ道南会の歴史や会則、入会のお勧め、新年総会・懇親会や夏季懇親会の開催案内、月例行事のご案内、機関誌「会報・道南」の一覧などを掲載して、会の情報を随時お知らせしています。ホームページについて、info@hokkaido-dounankai.com　へ、ご意見、ご要望などをお寄せくださいますようお願いいたします。

訃報

長島　康さん

平成29年10月6日
骨髄性がんのため死去
86歳

謹んでご冥福をお祈りします。

第1回ご当地ヌルヌル つるつる選手権で優勝

日本テレビの人気番組「鉄腕ダッシュ」のロケが、静岡県の島田球場で、10月30日～31日の一泊二日の行程で行われ、函館真昆布応援隊として、北海道道南会より島田瑞子・古井勝春・小山和彦・高橋順吉・花木瞳・藤谷幸子・三村寿雄の7人が参加しました。函館市からは農林水産部の櫻井貴之課長も上京。現地にて合流し、函館真昆布のヌルヌル仕込みの手伝いとして、昆布の端材を水に浸してよりヌルヌルにする作業などを行いました。

球場のホームベースからセンター方向に100㍍のコースを作り、コース上にヌルヌル食材を敷き詰めてTOKIOの城島茂君が体を張ってより遠くまで滑るヌルヌル食材は何かを競うというゲームでした。食材は、北海道代表が「函館真昆布」、岩手県代表「三陸わかめ」、群馬県が「大和芋」、沖縄県「オキナワモズク」、宮古島「アロエベア」が参加しました。

競技結果は、「函館真昆布」57.5㍍、「大和芋」53.7㍍、「三陸わかめ」49.2㍍、「アロエベア」46.3㍍、「オキナワモズク」39.1㍍と、「函館真昆布」が見事に優勝しました。

「函館真昆布」は、現在昆布の生産量は日本一で、1583年大阪城築城の際に昆布を敷いて石垣の巨石を運搬したとの歴史上の記述もあるようです。現在、全国的には北海道産の日高昆布や利尻昆布などの名前が行き渡っていますが、函館市では今後道南産の昆布を「函館真昆布」と統一して、全国的にPRしていきたいとのことです。

※なお、ヌルヌル食材に使用した昆布は、製品化される際に出る切れ端など廃棄処分されるものを使用しました。

道南会行事報告

☆真夏の暑気払いの会

今年の暑気払いの会は、7月29日（土）正午から港区東新橋の旧新橋停車場跡地のビヤダインニングライオン汐留店で会員31人が参加して行われました。ここの建物は、1872（明治5）年10月14日に開業した日本最初の鉄道ターミナル・新橋停車場の駅舎の外観を、当時と同じ位置に、できるだけ忠実に再現したもので、2階にあるビヤダインニングライオン汐留店の宴会場は、内外装とも昔を感じさせる落ち着いた雰囲気の会場でした。

最初に薬袋会長が、「本日は、美味しいビールと料理を楽しみたい」とあいさつ。早速ビールで乾杯し、開宴しました。ウインナーソーセージやピザなどのイタリア料理のコースをお酒の肴に和気藹々の楽しい雰囲気の中で、皆さんの話題の中心は、夏休みの過ごし方のこと。この後、ご参加の皆さんに自己紹介を兼ねた短いあいさつをしていただきました。

話題は尽きませんでしたが、午後2時50分過ぎに記念撮影をしていったん散会としました。

なお、小助川昭一さんが、函館・谷地頭電停前のお菓子屋「市中屋」から取り寄せいただいた“べこ餅”をお土産として皆さんに配布されました。

☆ニューオリンズジャズフェスティバル

8月23日（水）浅草公会堂で、ジャズの本場・ニューオリンズより来日したトーマス・フィッシャーとニューオリンズジャズオールスターズ（8人）と、日本の薗田憲一とデキシーキングスの演奏会が開催されました。今年で31年間連続の開催です。

今年は、道南会会員27人が参加され、皆さん本場の演奏に満足されておりました。

なお、ニューオリンズでは、今回来日されたメンバーの各々がリーダーのバンドマスターとして演奏活動をされており、日本公演のこの時のみ編成されて来日、素晴らしい演奏を聴くことができます。来年も公演の予定がありますので、是非ご参加ください。

☆「29年度夏季懇親会」

（別掲）

9月2日（土）午後0時開催

荒川区東日暮里

ホテルラングウッド

編集後記

◎気象庁が発表した長期予報によると、今年の冬は暖冬傾向とのことでした。また、函館でも暖冬との予報でした。しかし、東京は朝晩の冷え込みが厳しく、寒い毎日です。函館も降雪量が多く、交通量の多い幹線道路は別にして、住宅地の狭い道路などでは随所に雪が残っていて歩きにくく、買い物などの外出時にも不便さを感じていると、函館在住の親戚や友人などから便りがありました。

◎これに対し、東京地方などでは、年に数回の函館などに比べてはるかに少ない積雪でも、交通網は大混乱を来し、転倒して大けがをする人が多発しています。

◎ともすれば昔体で覚えていた雪道での経験を忘れがちではないでしょうか？油断をすれば少ない雪でも転倒事故など起こしがちです。お互い注意したいものです。

会報「道南」
30年・新年号・通巻67号
発行　平成30年1月1日
発行所　北海道道南会事務局
茨城県取手市西
1-6-C-907
薬袋　気付
印刷所　富士製版印刷㈱
世田谷区下馬4-17-17